

古代考古與現代社會之間的連結與對話 —旭川市博物館

古い考古資料と現代社会とのつながりと対話—旭川市博物館
Connection and Dialogue between Ancient Archeology and Modern Society
in Asahikawa City Museum

文・圖 | 陳由璋 (政治大學民族學系博士生)
譯者 | 石村明子 (專職中日文翻譯)

文章・写真 | 陳由璋 (政治大學民族學科博士後期課程)
翻譯 | 石村明子 (日中通訳翻訳者)

北海道大學^{愛努・先住民研究中心 (以下簡稱北大愛努中心)} 正逢成立10週年，於2018年2月舉辦紀念研討會。政治大學原住民族研究中心前主任林修澈榮譽教授，與現任主任黃季平教授，是僅受邀參加的兩位外國人。北大愛努中心為讓兩位老師更能體驗北海道當地的原民文化與歷史，由北大愛努中心常本照樹中心長與落合研一准教授導覽下，前往旭川了解當地愛努族現況，筆者有幸也能參與本次參訪。

北海道大学^{アイヌ・先住民研究センター (以下「北大アイヌセンター」)} で2018年2月に設立10周年の記念シンポジウムが行われ、唯一の外国人ゲストとして元政治大学原住民族研究センター長の林修澈名誉教授と現センター長の黄季平教授の2名が参加した。北海道ならではの先住民文化と歴史についての体験を深めてほしいとのことで、北大アイヌセンターの常本照樹センター長と落合研一准教授のご案内により、旭川のアイヌ民族について理解を深めることができたが、幸い筆者も同行することができた。



旭川市博物館入口。
旭川市博物館の入り口。



政大原民中心與北海道大學愛努・先住民研究中心參訪旭川市博物館與瀨川拓郎館長（中）合影。

政治大、北大アイヌセンター一行と旭川市博物館瀨川拓郎館長（中）の記念写真。

前往旭川市博物館參館

雖然路旁仍有高疊未溶的積雪，但陽光和煦地照耀下，一行人來到旭川當地愛努文化據點—旭川市博物館。很偶然地，當天剛好有當地小學生團體參訪旭川市博物館，這讓我們看到旭川市博物館不僅發揮社會教育，也與當地社會互動連結。雖然一行人未事先告知館方來訪一事，但現場北大愛努中心落合研一准教授為政大一行人協調館方並告知來意後，旭川市博物館館長瀨川拓郎不顧事務繁忙，專程前來為臨時到來的政大原民

旭川市博物館觀覽へ

路肩の雪は高く積もっていたが温かい日差しが降り注ぐ中、政治大一行は旭川のアイヌ文化の拠点である旭川市博物館に到着した。偶然にも地元の小学生が団体で見学に来ており、旭川市博物館が社会教育への貢献のみならず、地元の社会ともつながっていることが見て取れた。実は博物館には事前に連絡はしていなかったのだが、北大アイヌセンターの落合准教授が博物館側に訪問目的を説明してくださったおかげで、旭川市博物館の瀨川拓郎館長がご多忙にも関わらず全館内の展示について解説して下さることになった。瀨川館長は北海道札幌市の出身で、大阪の民族学博物館より博士を取得した。考古学とアイヌ学を専門とし、



中心老師們進行全館解說。瀨川館長是北海道札幌人，大阪民族學博物館博士，專業為考古學與愛努學，回到家鄉後便於旭川市博物館工作，致力於研究與館務。此次能親自與瀨川館長見面讓我格外興奮，因為筆者也曾留學過大阪民族學博物館，目前仍投入於愛努研究。留學時大前輩的瀨川館長的名聲於已如雷貫耳。之後更有幸拜讀並於課堂

上寫過瀨川館長《アイヌの歴史 海と宝のノマド》（愛努的歷史・海洋與寶物的游牧民族）此書的書評。此次我能見到館長本尊，可說是千載難逢的機緣。於是，在瀨川館長的迎領下，我們一行人踏入了展區入口處。

古代與現代社會的連結

首先入口處迎面而來的第一項展品，連結了古代與現代的時間脈絡，同時也代表了旭川市博物館的展覽理念。瀨川館長說明這個展品是由兩件物件組合，兩件都是在旭川當地山中所發現的，一件是考古時所發現古代祈神儀式的道具，另一件是現代愛努



旭川市博物館瀨川拓郎館長熱心幫忙介紹愛努族的儀式文化。

瀨川館長がアイヌ民族の儀式文化について紹介していた。

故郷の北海道に戻り旭川博物館で研究や館内業務に尽くしている。筆者は今回、瀨川館長に直接お会いすることができ、気持ちが高揚した。筆者も大阪の民族学博物館に留

学していたうえ、現在はアイヌ研究をしており、留学時には大先輩の瀨川館長の名声を耳にしていた。さらにちょうど授業で瀨川館長の著作『アイヌの歴史 海と宝のノマド』についての書評を書く機会があり、今回、瀨川館長ご本人に直接お会いするという千載一遇のチャンスに恵まれたのである。そして、瀨川館長のご案内で私たち一行は展示エリアへと足を踏み入れた。

古い時代と現代社会とのつながり

入り口で一行を待ち構えていた1つ目の展示資料は、古い時代と現代をつなぎ、旭川博物館の展示理念を示すものであった。瀨川館長によると、セットで展示されているこの2つの資料は、両方とも旭川の山中から発見されたもので、1つは祈りの儀式で使用され



人進行祈神儀式所用的兒童玩具。這兩件物件的共同展示，表現出古代考古與現代社會之間的密切性，也象徵了博物館的考古資料展示深刻地融入現代愛努族的生活之中，強烈表達出旭川市博物館的思維—古今兩者是不可切割的關係。

旭川市博物館的展示空間

博物館的展示空間，可分為一樓區與地下室區兩樓層。一樓主要展示愛努民族的歷史文化與相關考古資料。這一區瀨川館長從考古學專業角度，順著當地旭川愛努族的歷史與大和民族的開發史，為我們詳細解說博物館展示的概念與當地愛努族與大和民族兩民族的歷史文化。同時瀨川館長的說明下，我們得知從過去的煉鐵文化中，可發現愛努民族原本具有加

瀨川拓郎館長介紹愛努族的生活文化。

瀨川館長がアイヌ民族の生活文化を紹介していた。

た古い資料で、もう1つはアイヌが祈りの儀式で用いた子ども用のおもちゃである。2つの資料を一緒に展示することは、古い考古資料と現代社会との密接な関係性の表現であり、博物館の考古資料が現代アイヌの生活の生活に深く溶け込んでいることの象徴であり、旭川市博物館のコンセプトの強い現れである。古い時代と現代社会は切っても切れない関係なのである。

旭川市博物館の展示空間

博物館の展示スペースは1階と地下の2つの階に分かれており、1階は主にアイヌ民族の歴史文化に関する考古資料である。ここで私たち一行は瀨川館長から現地のアイヌ民族の歴史と大和民族の開拓史に沿って、考古学の専門的な視点からの博物館の展示コンセプトについての詳しい説明を受けた。それと、かつての鍛冶文化において、鉄器加工の専門の技術者がアイヌの中にも存在していたが、早くから北海道に移住し

工鐵器的技術與專職者，但在古代很早就有大和民族鐵匠移住北海道，這些鐵匠慢慢地取代愛努民族的鐵匠，愛努民族也就幾乎不從事冶鐵工作。

另一方面，瀨川館長在介紹愛努傳統家屋企瑟（愛努語：チセ／cise）時，首先點出旭川愛努民族的獨特工法是採用短竹葉（日語：笹／sasa）蓋屋，這跟北海道其他地區愛努民族的木皮屋有很大的差異。瀨川館長同時指出早期考古資料所發現的居住屋舍遺跡是半穴居，並非是後來蓋在地面的愛努族傳統家屋。以房屋保溫的角度來看，半穴居比起愛努族傳統家屋更有適合北海道寒冷氣候，從這一點來看，瀨川館長推測愛努民族的傳統家屋可能原本是適合更溫暖的南方地區，但某些因素，愛努民族才北上至北海道來。

結束了愛努文化專區的導覽後，一行人移動到地下室展示區。這區主要展示考古文物與史料，以及當地動植物生態。當我們看到這區擺設許多模型與重製的物件來說明考古發現，其中許多模型製作地十分巧妙細膩。在我們好奇詢問這些模型製作方式時，才知道這些考古模型都出自瀨川館長之手，這讓我們一行人敬佩館長的用心經營與手藝巧妙。同時我們看到博物館在瀨川館長的構思下，是如何落實新博物館學的思維。旭川市博物館不是以實體物件為主體，而是以



旭川市博物館以漫畫的方式展示說明館藏的文物，讓參觀者更容易理解。

館内で展示した文物は參觀者が理解しやすくなるために漫画で説明されていた。

た大和民族の鍛冶職人がアイヌのそれにとって代わっていき、アイヌは鍛冶を行わなくなったということも館長の説明により知ることができた。

また、瀨川館長にアイヌの伝統家屋のチセについて紹介していただいた。まず、旭川アイヌの建築は笹で造られる独特なものであるが、これは北海道の他の地域のアイヌの樹皮建築とは大きく異なるという説明を受けた。それから、古い考古資料では半穴式住居で、地面の上に建てられる後のアイヌの家屋とは違うという説明も受けた。保溫の点から見ると半穴式はアイヌの伝統家屋よりも北海道の寒い気候により適しており、一方のアイヌの伝統家屋はもっと南の温かい地方に適したものであることから、何らかの要因で、アイヌ民族が北上して北海道に来たのだろうと瀨川館長は推測しているようだ。

アイヌ文化展示の観覧を終えて一行は地下の展示エリアへと移動した。このエリアは考古資料、史料、



瀨川拓郎館長說明愛努族的作物。

瀨川館長がアイヌ民族の作物について説明していた。

參觀者為主體，將考古資料所發現的歷史，以敘述故事方式呈現。呈現方式不受限以往博物館學的知識權力型解說法，而是採漫畫、模型、大型畫布、聲音重現等多元方式與參觀者互動對話。

隨春風綻放搖曳的愛努之花

瀨川館長為我們一行人帶來以上精采的導覽與說明後，在意猶未盡之下，我們的參訪也進入尾聲。一行人回到入口處即將告別旭川市博物館之際，瀨川館長突然趕回辦公室，帶來他的新作《繩文の思想》，並親手簽名後贈送給我們一行人。雖然2月的旭川的春天還未到，但瀨川館長的用心，已讓旭川市博物館裡愛努文化的花朵，隨春風綻放搖曳著。◆

地元の動植物等の生態に関する展示が中心だが、主に模型や複製品を用いて考古学的発見の説明を行っている。非常に精巧な作りの模型が多かったので、模型の制作について伺ったところ、出土に関する模型は瀨川館長が自ら制作されたとのこと、一行は館長の心のこもった博物館運営や手先の器用さに感銘し、館長の構想のもとで新たな博物館学の思索をどのように定着させていくかということ垣間

見ることができた。旭川市博物館の主体は実物ではなく參觀者であり、出土品によって明らかになった歴史を物語の手法を使い表現している。それは従来の博物館学的知識の権力による解説から離れ、漫画や模型、大型のタペストリーや音など様々な手法で行う參觀者との対話なのである。

春風に咲いて揺れるアイヌの花

瀨川館長の素晴らしい案内と説明を受けた私たち一行の訪問は、名残惜しくも終わりを迎えつつあった。入口に戻り別れのご挨拶をする際、館長は突然事務室へ戻ったかと思うと、ご自身の新著である『縄文の思想』にサインを書き込み、一行に贈ってくださったのである。春はまだ遠い2月の旭川だったが、瀨川館長の心遣いは旭川市博物館に春風に揺れるアイヌ文化の花を咲かせていた。◆